



「モスレムの子供たち」(説明13p)

於:スリランカ・コロンボ 2006年8月撮影
日本スリランカ文化交流協会・代表 為我井輝忠

🌸 'わんりい'144号の主な目次 🌸

北京雑感 (35) 「北京の小鳥」2
私の調べた四字熟語 (33)「鶏鳴狗盗」3
物知りノート (9) サッカーの起源について4
中国を読む (59)「日朝関係の克服…」5
山西省あちらこちら (5)太行山6
媛媛讲故事 (14)「梁山伯と祝英台」II8
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より9
四姑娘山・写真便り (19)「長坪村の地震復旧状態」10
アフリカとの出会い (33)「クラン・地域の絆」11
スリランカ紹介 (29)「ジャフナ珍道中IV」12
私の四川省一人旅 (25) 亜丁 1214
'わんりい'活動報告・サークル祭16
わんりい'掲示板 I・II17・18
5月の歌・歌詞18

♪「中国語で歌おう!会」6月の歌 ♪

哈萨克民歌「玛 依 拉」
mǎ yī lā

6月は明るくて楽しいカザフスタンの民謡を歌いましょう! (歌詞 18p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口
徒歩5分町田東急裏 109ファッションビル 7F

6月19日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳英 (中国人歌手)

録音機お持ちの方は、ご持参下さい

● ご予約ください!

「中国で歌おう!会」7月の講座日は
7月17日(金) 19:00~20:30 です

*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局
(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

最近の新聞で、一時数が減ったと見られていた都会（東京）のカラスが、再び増えてきたとのニュースを見ました。確かに、都会とも言えない我が家の近くでも、よく見かけるようになりました。別の機会に、“ハトに餌をやらないでください” 作戦で、ハトが大分減ったと言うニュースを聞きました。人間がちょっとかかわることで、そんなに影響があるのかと驚いた覚えがありますが、カラスの復活は、何故なのでしょうね。人間のゴミの管理が甘くなったからだとは思いたくないのですが、どうでしょうか？

北京で、私はあまりカラスを見かけませんでした。ゴミの出し方は、あまりお行儀良くありませんでしたが、カラスが群がるという光景には出くわしませんでした。でも、知人の中には、「カラスはかなりいる」と言う方も居られるので、一概に少ないとは言えないかも知れません。

北京の小鳥で、いつも思い出すのは、私が初めて北京を訪れる前、友人が冗談で、「北京には小鳥がいない。皆食べられてしまうから」と言ったことがあります。確かにその旅行中、カラスやスズメ、公園のハトさえあまり見かけず、“食べられる” は無いにしても、小鳥は少ないだろうと、その話を信じる気になりました。

ところがそれから間も無く、北京で暮らすことになって、初めての朝、何と、カッコーの声で目が覚めたのです。カッコーばかりでなく、三光鳥に似た鳴き声の鳥や、キツツキのドラミングまで聞こえるのには本当に驚きました。東京でも、明治神宮や新宿御苑などには鳥も沢山いるでしょうが、傍に人家はありませんよね。このカッコーの声は、3万人以上が暮らし、学生が自転車で往来する大学構内に建つ宿舎の部屋で聞きました。大学の構内では、大きな樹が林立し、芝生が整備されていて、リスがちょろちょろ走り廻ったり、カケスのような鳥が芝生を突付いて歩いたり、小動物がのんびり暮らしています。旅行では、こんな所にはめったに立ち寄らないので、北京には小鳥が少ないと思うのも当然でしょう。

確かに、街でカラスやスズメを見かけることは少ないのですが、北京には籠の鳥がいっぱいいます。退職した老人達が、鳥かごを持ち寄って、公園の樹の枝に吊り下げて、良い声で鳴かせて楽しんでいます。良い声で鳴く鳥を自慢したり、良い声の鳥のそばに籠を置いて、自分の鳥に上手な鳴き声を習わせたりします。飼われている鳥の種類は何種類かあるようですが、皆それぞれに良い声で鳴いていました。

鳥かごは、丸い筒形ものです。持ち運ぶ時は、かなり

厚手の布カバーを掛けて、手に提げたり、自転車のハンドルや荷台に渡した棒に二つ三つ掛けたりして運び、一度などは、北京でよく見かけるリヤカーの様な車に五つもの籠を乗せているのを見かけました。

小鳥を飼っている方々は、愛情を込めて接しているのですが、籠を運ぶ時は、かなり乱暴に運んでいます。両手に鳥かごをぶら下げて、大手を振って歩いている老人がいたので、「どうしてそんなに振り回すのですか？中の小鳥が可哀そうでしょう？」と訊いた事がありました。するとその老人は、「こうすると、中の鳥は止まり木でバランスを取ろうと頑張るので、それが運動になって良いのだ。」と教えてくれました。

もう一つ、意外だったのは、北京で伝書鳩を飼っている人達がかかなり沢山いることです。朝夕、何気なくマンションの窓から外を眺めていると、二十羽ほどの鳥の群れが円を描いて飛んでいるのを目にします。群れが二つ三つ見えることもあります。伝書鳩の運動です。マンションの目の下に、4階建てのアパートがあって、その4階でも飼っているの、外に出された群れが、建物の屋根でのんびりと日向ぼっこをします。一羽が飛び立つと一斉に後を追って、飛び上がり、円を描いて何周も何周も飛び回り、気が済むとまた屋根に降り立ちます。目の前に、清朝時代に建てられた古い塔があるので、何羽かはその塔の屋根で羽を休めたりしています。

この塔は、清朝王族の誰かの墓所らしいのですが、今まで残ったのが奇跡のようで、私が見るようになってからも随分痛みが進んだようです。ハトの糞害に遭えば、被害も加速されるのではないかと心配しながら、それもののんびりと眺めていました。そんな時、チョッと思い出しました。以前、北京の公園では、日本のようにハトが遊んでいるのを見たことはありませんでしたが、ここ3、4年、ハトが遊ぶ公園が目立つようになりました。これも、ハトの飼育が流行ったことと何か関係があるのかも知れませんね。

北京のスズメはどうでしょうか？ 街中で見かけることは本当に少ないのですが、たまに見かける時いつも感じるのは、北京のスズメは、日本のスズメより小さいということです。ところが、北京の友人は、これを聞くと気を悪くします。それで、「周りの建物が大きいので小さく感じるのかしら」と逃げを打ちましたが、実際は、「やっぱり小さい」と思っています。

皆さん、若し北京でスズメを見かけたら、是非、大きさを注意してみてください。そして、感想をお聞かせください。

鶏鳴狗盗(けいめいくとう)という熟語は耳にしたことはありますが、残念ながら筆者はあまり用例を知りません。でも出自の物語が分かりやすく内容も面白いので取り上げることにしました。

勿論辞書には日本語辞典、中日辞典ともにしっかり載っています。

三省堂 大辞林：

「**鶏鳴狗盗**〔齊の孟嘗君が秦の昭王に幽閉された時、こそどろやにわたりの鳴き真似のうまい食客の働きで逃れたという『史記孟嘗君伝』の故事から〕にわたりの鳴き真似をして人をあざむいたり、犬のようにして物を盗んだりする卑しい者。小策を弄する人」

小学館 中日辞典

「**鸡鸣狗盗** (jī míng gǒu dào) 成語 鶏鳴狗盗
二ワトリの鳴きまねをして人をあざむいたり、犬のように物をこっそり盗む技術、つまらない技能(または、ちょっとした技術)を有する人のたとえ」

そのほか、インターネットのYahoo! 百科事典では、孟嘗君のエピソードを紹介したあとに、“転じて、とるにたらない小人物でも使い方によっては役だつという意に用いられる”と有ります。

これらを比較してみると、この熟語にはいくつかのたとえがあるようですね。

この成語の出自は「史記・孟嘗君列伝」です。

秦の昭王は齊国の賢相として聞こえた孟嘗君を秦国に迎え入れました。孟嘗君は大変多くの食客を伴って秦国に赴きました。この時この世に二つと無い白狐の毛皮のコートを秦王に献上しました。

後に秦王は孟嘗君が齊王の一族であることを考えると、将来秦国にとって危険な存在になるかも知れず、また孟嘗君が秦国の状況を知りすぎてしまったとも思い、彼を国に帰すことはならず、監禁して後で殺してしまおうと考えました。

あるとき秦王の弟の涇相君が秦王の考えていることを孟嘗君に内密に教えてくれました。そのうえ秦王の寵愛している燕姫に会って助けてくれるように頼んで

みてはどうかとも提案してくれたのです。そこで燕姫に会ってみると、意外にも彼女は孟嘗君が秦王に献上した、この世に二つとないと言われるあの白狐の毛皮のコートが手に入るなら自分が助命を頼んでも良いと答えたのです。

孟嘗君はどうしたら白狐の毛皮のコートを取り戻すことができるか、食客たちに相談をしました。すると末席のほうに座っていた食客のこそどろが「私が狗のようにすばしこく宮殿の蔵に潜入して、以前あなた様が秦王に献上した白狐の毛皮のコートを盗み出しますよ。」と言いました。はたしてその食客は皆の期待通り、その夜蔵に潜入し、その毛皮のコートをまんまと盗み出しました。

孟嘗君がそのコートを燕姫に渡しますと、姫は約束通り秦王に孟嘗君の助命を頼みました。寵愛する姫の頼みとあつて秦王は渋々ながらも孟嘗君を釈放したのです。孟嘗君は秦王の気持ちが変わらないうちに、早々に大勢の食客とともに秦の都を立ちました。

一行が函谷関の関所にたどり着いた時はまだ夜明け前で、関所の門は閉まっていて、一番鳥もまだ鳴いていませんでした。関所では朝一番鳥が鳴いたら門を開けて旅人を通す規則になっていたのです。孟嘗君はこのまま関所が開くのを待っていたのでは追っ手に捕まってしまうのではないかと思い、早く一番鳥が鳴かないかと気が気ではありませんでした。そこで食客の中にいた鳥の鳴きまねの大変上手な男が試しに鶏の鳴きまねをしてみると、近所の鶏たちがつられて一斉に鳴き始めたのです。直ちに関所の門が開けられ、全員が秦の国から逃げ出すことができました。

秦王は案の定孟嘗君を釈放してしまったことを後悔して、追っ手をかけたのですが時すでに遅かったのです。

蛇足ですが、小倉百人一首の第62番に清少納言が鶏鳴狗盗のエピソードを絡めて読んだ歌があります。

「夜をこめて 鳥の空音は謀るとも よに逢坂の関は許さじ」(夜がまだ明けないうちに、鶏の鳴き真似をして人をだまそうとしても、函谷関ならともかく、この逢坂の関は決して開きませんよ=だまそうとしても、決して私はあなたに逢いませんよ)

ご参考まで。

サッカーのワールドカップが開催されようものなら、サッカーの人気は世界規模で沸騰しますが、そのサッカーの起源については諸説あり、その中でもこれまでのところはイングランド説が最有力でした。

しかし、国際サッカー連盟 (FIFA : Federation Internationale de Football Association) のシャンパーニュ事務局次長が中国起源説を正式に認定したという記事 (「人民網」日本版2004年*) も発表され、にわかに中国起源説が有力になってきました。1400年前に日本にも伝えられた蹴鞠 (けまり) が確かにその起源としてありうることを考えて見たいと思います。

蹴鞠についていえば、B.C.300年以上前の戦国時代齊の国の都・臨淄 (lín zī) 市 (現在は、淄博市臨淄区) がその発祥の地であると言われています。

司馬遷の史記 (B.C.91 頃完成) に次のような記述があります。

「臨淄は7万戸を擁する商工業の発達した賑やかな大都会であった。臨淄の名医「淳于」の診察した記録の中に、医者 of 言うことを聞かず蹴鞠に熱中しすぎて不治の病にかかった患者がいた」

すなわち臨淄は齊の文化の発祥の地であり、蹴鞠は春秋戦国時代に齊の国で誕生したものであり、その文化は歴史の変遷の中で紆余曲折はありましたが、今日まで姿を変えながらも保存されてきているといえます。

中国の蹴鞠の歴史は戦国時代軍事教練の一環として採り入れられたのがはじまりで、漢の時代には12名のチームで鞠を争奪し「球門」に入れた数を争うという遊技として確立し、宮廷内で大規模な競技が行われました。唐代にはルールが多様化し球門は両チームの間の網の上にもうけられたりしました。鞠は羽を詰めたものから、動物の膀胱



2チームに別れた競技の様子 (真ん中のまるい球門に球を通すと得点になる)

胱に空気を入れ良く弾むものへと変わってきています。

この蹴鞠がモンゴルの西方遠征などの折に次第に西の方に拡がり英国にも伝えられたということも考えられる

かもしれません。東南アジアでも中国の蹴鞠が起源とされているセパタクロー (蹴る鞠という意味) が盛んに行われています。

宋時代になると競技としての色合いが薄れて一人又は集団で地面に落とさないように蹴る技を披露する遊びとなってゆきました。しかしその後貴族や官僚があまりに熱中しすぎるというので明時代には禁止令が出され、また清時代にも禁止令が出されたため、蹴鞠はほとんど見かけるこ



淄博市 (山東省) の位置



臨淄区から出土した蹴鞠の彫り物



淄博市に今も保存されている蹴鞠



日本における蹴鞠の伝統行事の様子

とがなくなってしまいました。

蹴鞠は日本へはA.D.600年代に仏教などととも中国より渡来しました。中大兄皇子と藤原鎌足が蹴鞠がきっかけで親密になり、A.D.645年大化の改新が興ったことは知られていることです。

平安時代は蹴鞠は宮廷競技として貴族の間で広く親し

まれるようになり、清少納言の「枕草子」にもその記述があります。そしてその後、貴族だけに止まらず、天皇、公家、将軍、武士、神官また一般大衆・老若男女を問わず、広く親しまれるようになったようです。

日本の蹴鞠に様々な決まりが完成したのは鎌倉時代だと言われています。四隅を元木(蹴り上げる高さの基準になる)で囲まれた三間ほどの広場の中で行われ、1チーム4～8人で靴を履いた足で蹴り上げどのくらい続けられるかという団体戦と、鞠を落とした方が負けという個人戦とがありました。

現在でも伝統行事として各地で蹴鞠が行われているのはよく知られていることです。

* http://j.peopledaily.com.cn/2004/02/05/jp20040205_36345.html

参考資料：

- 淄博市および臨淄区ホームページ
- インターネット百科事典「Wikipedia」

中国を読む(59) 「日朝関係の克服—なぜ国交正常化交渉が必要なのか」 姜尚中著 集英社新書



第二回ワールド・ベースボール・クラシックで5回も戦ったお隣韓国。韓国の報道や韓国選手の行動で「あれ? やっぱ韓国って日本のこと嫌い?」と思われるシーンがいくつかあった。

WBCのように、野球に興味ある人もない人も、子どもも若者も中高年も高齢者も、国際社会に関心がある人もそ

うでない人も注目する場で、そのようなシーンを見かけると、なんだかとても寂しい気持ちになる。

そんな時期にこの本を読んで、韓国も北朝鮮も日本のことが嫌いなんだと改めて思う。

理由は植民地支配のことだけではない。朝鮮半島が南北分裂したきっかけにはあの戦争があり、日本は分裂の原因の一旦を担っている側面もある。さらに同じ民族で争った朝鮮戦争の影では、その軍事的な特需で日本が経済復興を遂げたという事実がある。韓国・北朝鮮にとっては、南北分裂という現実はずっと続いており、「過去のこと」は「現在のこと」でもある。もしか

したら、日本はその認識がとっても甘くて、知らずに韓国や北朝鮮の人たちの気持ちを逆なでしているのかもしれない。

一方、日本では拉致問題が未解決のまま横たわっている。著者の姜氏の主張は一貫している。拉致問題を解決するためにも、日本は北朝鮮と国交を正常化するべきだと、姜氏は繰り返し述べる。北朝鮮が拉致を認めたことは大きな譲歩であり、日本はそれに対して怒りではなく、北朝鮮との関係改善の姿勢で望まなければならないと著者は言う。

姜氏の主張は頭では理解できるが、感情面で納得できない。しかし、にらめっこをしている間に関係がどんどん悪化し、「ありえない」と思っていた9.11のような事件がすぐ側で起きてしまったとしたら。益々、私たちは北朝鮮を許せなくなってしまう。負の連鎖はさらに続いていこう。

もしかしたら、今がラストチャンスかもしれない。お互いが許し合わなければ、負の連鎖がずっと続いていく。どこかで「怒り」を乗り越え、「日朝関係の克服」をしなければいけないのだとすれば、早いに越したことはない。

(真中智子)

山西省の東南端、河北省と河南省に接する所に太行山大峡谷があります。

ここは数億年前に海底であった所が隆起し、その後、風化と浸食作用によって深く削られ、高い岩壁がそそり立つ大峡谷となりました。その中に、いくつかの、水と緑の豊かな、美しい景観の渓谷が森林・地質公園として整備されています。4月下旬に訪ねてみました。

第一日目：出発は北京から飛行機で1時間の山西省・長治市。そこから車で約1時間、両側に低い丘陵が続く農村地帯を抜けると、徐々に山が高くなり、両側に山の斜面が間近になってきた頃に大峡谷の入り口につきました。

途中の農村では小麦畑が青々とし、木の葉の柔らかい緑色、桐の花の薄紫色、桜桃の桃色、杏の白色など、これらの色が溶け合うようにして、目と心を楽しませてくれました。

大峡谷に入り、山が眼前に迫ってくると、斜面が黄色のレンギョウの花でいっぱい埋め尽くされているのに驚きました。このあと、どこへ行っても山の斜面はレンギョウの花で一杯でした。現地ガイドによると、このレンギョウは当地ではインチャオ(銀翹)と呼ばれ、茎は風邪によく効く漢方薬の材料として使われ、さらに昔は、秋に太めの茎を刈り取って、屋根を葺く材料にも使われ、とても有用な植物なのだそうです。

入口からさらに進むこと約1時間、ようやく一番奥まったところにある目的地の「青龍峡」につきました。途中、曲がりくねった道の両側は一段と狭まり、首を90度に曲げて見上げた空は狭い岩壁と岩壁の間で青く細い筋のようでした。駐車場に地質博物館がたっていました。残念ながらまだ開館準備中で、中の展示を見ることはできませんでしたが、公園内の遊歩道のところどころにいろいろな岩石の説明があり、足を止めてしばし岩石を眺めたり、触ったり、歩きながらのミニ体験学習もなかなか楽しいものでした。

全長約5kmの青龍峡では入口のある下流から上流に向かって遡り、一番奥にある集落のところから引き返すという、ゆっくり歩いて約3時間の周遊コースになっています。峡谷両側の壁と壁の間の幅は広く、岩石がごろごろしている河原には草や花も多く、そのせいか明るい開放感を覚えました。緩やかなアップダウンを繰り返しながら、小さな草花に目を留め、岩を眺め、岩壁から落ちてくる滝を眺めつつ遡り、昼食は途中の小さな集落の農

家の食堂でとりました。メニューはタンポポの葉、セリ、チャンチン(香椿)、エンジュの花など、今の季節に採れるこの土地の野草や木の若葉、花の料理や、目の前の小川でとれた小魚の唐揚げなど、どれも美味しく、しかもこれまでの中国料理のイメージとは全く違うものをいただくことができました。

ガイドによると、現代の中国人はストレスの多い生活をするようになったので、最近、このような自然の魅力にあふれた場所へやってきて、森林浴をして新鮮な空気を吸い、歩くことによって身体を鍛え、土地の新鮮な食べ物を食べるという休暇の過ごし方に人気が出てきたのだそうです。農家民宿もいくつかありました。ゆっくり滞在する人も増えつつあるそうです。

第二日目は「紅豆(hóngdòu) 峡」へ行きました。渓谷の名前は本来亜熱帯気候地域に育つ紅豆杉(別名：相思木)が、わずか1000株ほどですが、この渓谷に育ち、非常に貴重なものとして、国家級保存樹木に認定されたことから来ています。その赤い種子は小豆大ですが、永遠に変わらない想いを表すものとして、恋人や友人への贈り物として人気があるそうです。

この渓谷は、入口は狭く、中ほどは少し広く、ちょうど瓢箪の形のように、しかも両側には高い岩壁がそそり立っています。そういう地形から、渓谷内の気温や湿度が周りの場所と比べて少し高く、植物の種類が多く、紅豆杉以外にも希少な植物が多いそうです。「紅豆峡」は「青龍峡」の明るい広がりのある姿とは違い、両側から高い岩壁がぐっと迫ったり、張り出しており、狭い渓谷の底の岩の間を縫うように歩くので、圧迫感や緊張を覚えました。

岩の隙間から高く見上げる空は「一線天」と言われる細い筋のようです。遊歩道は大きな岩に取り付けられた鉄製の栈道や梯子、階段などが多く、足の下を流れる水や淵が見え、スリルを覚えます。湯水期だったので水量は少なかったのですが、夏の水量の多い時には水の流れはさぞかし迫力があり、スリルも増すことでしょう。岩と岩との間に渡されている梯子や階段は勾配が急で、ちょっと息が切れました。岩壁を抜けると山の斜面に取り付けられた石の階段になりました。これも勾配がきつく、途中で休憩をしながら上りました。私は登山用の装備で、一応非常用の食料や雨具なども持って上りましたが、一緒に登っていた中国人たちの多くは、町で履く普通の靴、手には水の入ったペットボトル一本というとても簡単ないでたちでのぼってきました。

考えてみると、ここでは渓谷の自然の道を歩くのではなく、作られた、決められた遊歩道以外は歩くことができません。遊歩道の途中には急勾配の階段や梯子、長いつり橋などがあり、スリルを味わう仕掛けがそこここにあります。尾根の上に出るまではおよそ2時間の距離で、体力的にもそれほど疲労するものではありません。しかし、散歩としてはかなりハードです。手軽に、安全に、自然を楽しみつつ体も鍛えられるアスレチックフィールドと考えるのがいいのかもしれませんが。

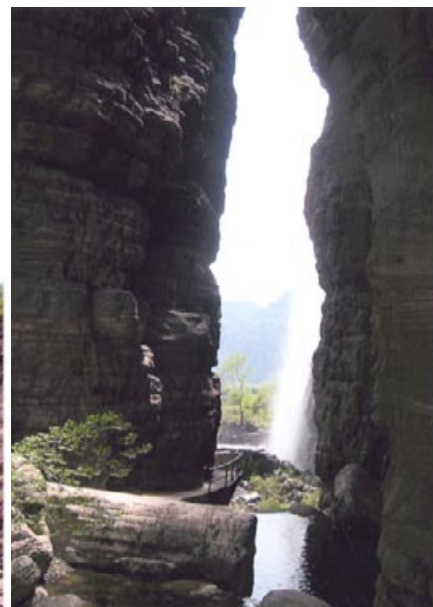
長い石の階段のところでは疲れて休む人が多かったものの、老若男女、いろいろな年齢構成の人々が、みんな楽しそうに登っていました。道は山頂には行かず、尾根の反対側に出ると下りになります。下山口には滑り台もあり、私は滑り台でおりました。これもまた勾配がきつく、多くあるカーブで速度を落としながら10分程で下へ着きました。何十年ぶりかで子供に戻って、心がわくわくしました。

第3日目は今は使われなくなった古道を見に行きました。羊の腸のように細く、くねくねしているのが、羊腸坂道と呼ばれています。約100年前まで使われていた河南省へ通じる道で、自分で荷を担いだ行商人が使っていたそうです。この大峡谷を抜けるには徒歩で3日を要し、今でも山中には狼や豹が生息しているそうで、当時この道を歩くのはどんなに心細かったことでしょう。

道は幅が約1mの、石で舗装をされた道です。谷底から少し上がった山の斜面の岩石を熱し、その



上図は山西省全図。緑の部分が大行山森林公園のある壺関県。壺関県の右半分が大行山森林公園区域。



▲ 紅豆峽 岩壁の間に続く道

◀ 青龍峽にかかる滝



鋸歯のような王莽嶺

あと水をかけて脆くなったところを砕き、道とし、その上に同じ大きさに切った石を規則正しく敷いてあります。敷石の下には安定させるために小石をかませています。道の保守・管理はきちんとされていたそうで、今ではところどころ崩れ、草が生い茂っていますが、それでも道のたたずまいは美しく、ずっとこの道を歩いてゆきたいと思わせるほどでした。

第4日目は大峡谷を数十キロ移動し、西端にある「王莽(wáng mǎng)嶺」へ行きました。ここは山の上から雄大な景色が眺められる人気の場所です。山の標高は1600mぐらいですが、河南省側に面した岩壁はほとんど垂直で、深く落ち込み、その高度差は実際以上に大きく感じられました。谷底の先は平原、いわゆる「中原」に続いています。山の上の遊歩道を歩くと左右に視界が開き、大峡谷が遠くまで見渡せ、前日まで谷底を這いまわっていた身には何とも言えない開放感を味わいました。

今回は太行山大峡谷の四つの異なる姿をちらっと見てきました。次にゆくときには、農家民宿に泊まって、古い道を尋ねたり、この地の人々の暮らしを学んだりしたいと思っています。

祝英台が郷里に帰る日、梁山伯は遠方まで祝英台を見送りについて来ました。

その途中、井戸があるのを見つけた祝英台は井戸中に自分の姿を映すと、

「兄さん、見て、見て。ねえ、井戸の中にとても綺麗な女の子がいるのよ。好きですか？」

と梁山伯に問いました。祝英台は自分が女の身であることを暗に知らせようと思ったのです。しかし、時に真面目過ぎるほどに真面目な梁山伯は、

「からかわないで。あれは弟じゃないか」

と言って、祝英台が女性であるとは全く気がつきませんでした。

そして終に二人の別離の時が来ると、祝英台は梁山伯に言いました。

「私には顔も性格も私とそっくりな妹が一人います。ぜひ家に来て会って下さい。そして気に入ったら是非お嫁さんにしてあげてください」

「あ、ほんとうですか？ それでは必ず行きますよ」

「では、約束しますね」

「はい、約束します」

やがて祝英台は故郷の家にたどり着きました。しかし、父が杭州の学問所から彼女を戻らせたのは、実は祝英台をさる高官の息子と結婚させる為でした。祝英台はきっぱりと拒絶し、自分には梁山伯という、思いを寄せる男性がいること、彼の学問が終わって彼女のもとにやって来、求婚してくれるのをどうしても待ちたいと父に話しました。

父は非常に怒り、

「梁山伯の家は家柄も良くない上にひどい貧乏ではないか。わしのような身分の娘をそんな家の男に嫁がせるわけにはいかん！」

という祝英台がどんなに父親を説得しようとしても反抗しても、父の考えは変わりませんでした。

一方、杭州で勉強を続けている梁山伯も故郷に帰った祝英台を片時も忘れることはなく懐かしく思っていました。そしてやがて彼も学業を終える日を迎えることができると喜び勇んで直ちに祝英台の家に向かいました。梁山伯が祝英台の家にやって来



梁山伯と祝英台の墓

梁山伯の故郷である寧波市鄞州区高橋鎮にある「梁祝文化公園」にある梁山伯と祝英台のお墓。中国には、梁祝のお墓といわれるところはいくつかあるが、ここが最も有力な証拠を保有しているところといわれている。

てみますとなんと彼の前に現れた祝英台は美しい妙齡の女性ではありませんか。

梁山伯は祝英台と一緒に過ごした三年間の出来事的一幕一幕を走馬灯を見るように思い浮かべ、また、かつて祝英台が話した微妙な話しをいろいろ思い出し、やっと祝英台が間違いなく女性だったことを悟りました。

しかし、梁山伯の驚きや喜びも束の間、祝英台は両目に涙をいっぱい溜めて、父が彼との結婚に反対していることを梁山伯に告げなければなりません。梁山伯はその事実を聞くと辛さのあまり一言も言葉を発することができず口を閉ざしたまま祝家を去って自分の家に戻りました。

家に帰っても、梁山伯は最愛の人と結婚できないことがあまりにも辛く悲しく終には重い病気になるとあつという間に亡くなってしまいました。

祝英台は梁山伯の思いも寄らない死の知らせを聞くと、三日三晩激しく泣き明かしました。四日目の朝、彼女は泣くのを止めると父に言いました。

「私の願いを一つだけ承知してください。そうしたら私はその高官の息子と結婚します。結婚の日、私が乗った輿は必ず梁山伯の墓前を通ってお参り

させていただきます」

父は渋々ながら高官の息子に娘を嫁がせるためには、娘の願いを許さないわけにはゆきませんでした。

婚礼のその日、花嫁の輿が梁山伯を葬った墓地の前にやって来ました。

祝英台は輿を下りて墓前にぬかずき、悲嘆に連れながら激しく泣きました。すると天空が俄かに暗くなり、強風が渦を巻いてびゅうびゅうと吹き始めました。激しい雨も地面を打ち始め、まるで天を裂くような雷鳴が轟いて大地が揺れると、突然、梁山伯の墓にぽっかりと大きな裂け目がありました。

祝英台はあっという間に墓の中に吸い込まれるようにその裂け目に飛び込みました。そして墓の裂け目は元のように閉ざされてしまいました。

やがて強風は吹き止み、激しい雨も降り止んで再び太陽が現れました。見れば墓の周り一面に様々な花々が色どりも豊かに咲き競っていました。

その美しく優しい風景に誘われたように、一対の色鮮やかな蝶が墓の中から舞い出ると、周囲の花々の上をひらひらと楽しそうにむつまじく飛び交うのでした。

人々はその仲良く飛び交う一対の蝶に梁山伯と祝英台の二人の姿を重ね合わせ、二人は、きっと別の世界で、誰にも邪魔されず共に幸せに暮らせるようになったのだと信じたのでした。

① 浙江省杭州市の西湖の東南に鳳凰山があります。その山に今もある万松書院が、その昔梁山伯と祝英台の二人が勉強したところといわれています。また、寧波市の西へ5km離れた鄞州区には梁山伯廟があり、中に梁山伯と祝英台を合奏したお墓があるといわれています(前ページ写真)。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報 'わんりい' は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

松本杏花さんの俳句

yú qíng cán xīn

「余情残心」より

ゆがみみる庵のガラスや花擬宝珠

bō li rěn wāi xié

玻璃任歪斜

cǎo ān mén chuāng fēng yǔ cā

草庵门窗风雨擦

yāo yāo zǐ è huā

夭夭紫萼花

季语:紫萼、夏。紫萼为百合科紫萼属多年生草本植物的总称。叶丛生、竹片形或宽卵形。夏季开穗状的白色。浅紫色、紫色花朵。

赏析:此句将草庵的陈陋荒寂与花草的茂盛繁荣来作对比、烘托出时光流逝带来的苍凉感。



十葉や晚翠ベットの小さかり

bì bì yú xīng cǎo

碧碧鱼腥草

wǎn cuì huā tán cháng kāi le

晚翠花坛长开了

huā sù yè shèng mào

花素叶盛茂

季语:鱼腥草、夏。鱼腥草是三白草科多年生草本植物。高约50厘米、全草有腥气、初夏在白色四瓣花瓣状苞上开黄白色穗状小花。地下茎和叶可入中药。

赏析:此首俳句借茂盛的鱼腥草比喻土井晚翠的文风扎根于民众之间、逢勃相传。





写真1 長坪村の溪流にも春が廻ってきました。

✳ 復興の槌音

昨年‘わんりい’の皆様が地震見舞いの電気毛布や学用品をご寄贈下さった標高3200mの長坪村にも5月に入ってやっと春が廻り来て溪流の傍で桜やタンポポの花が咲くようになりました(写真1)。そして民家の復旧も本格的に進んで壁が大分出来上がってきました。

ほとんどの民家では麻子石と呼ばれる花崗岩を50×20×20cm位に切り出した石材を積んで壁を作ります。以前は石材を泥で固めていましたが、昨年の地震でこの壁が酷く壊れた教訓から、今ではセメントで固めながら積む家がほとんどです(写真2)。ただ壁の厚さは昔の家が50～60cmなのに対して今は40cm前後に減っていて、セメントを過信しているのではないかと心配の声があります。

またコンクリートブロックも部分的に使われるようになりました。長坪村で使われているのは、日本で多く使われているものと違って、空洞がありません。日本では鉄筋を通しながらコンクリートブロックを積みますが、長坪村ではそのままセメントで固めながら積みで行きます(写真3)。昨年の地震の時はこの積み方でも崩れなかったのですが、この数年以内に建てられた新しい家での話しなので再び地震に見舞われた時が心配です。

長坪村の南側では新しい民家が50軒位ズラリ並んで建てられつつあります(写真4)。これは地震後に山の上などから移住して来た人達の家で、長坪村に町のような

通りができつつあります。政府の計画では広場や高い石の塔や巨大な仏塔も建てられる事になっていますので、これから村の様子がガラリと変わりそうです。

長坪村の民家は建築ラッシュで忙しい雰囲気の中にもありますが、昨年の地震の震源地になったアバ州全体でも一斉に短期間に地震の復旧工事を完成させようとしているため、ガソリン代に連動した生活物資値上げも加わって建築材料や建築機械のレンタル料や作業者の日当等が地震前の2倍位に高騰しています。加えてふんだんな復興資金を使ってそこらじゅうで道路の補修工事や、これまで手を付けなかった小さな溪流の出会いでもあちこちで新しく橋を掛けていますので、それだけでなくも増えている旅客や物資の輸送の足を引っ張っています。しかしそんな姿を見ていると何10年も昔の日本を思い出して、当地のバイタリティの凄さに感じ入ってしまいます。

なお以前にお知らせしましたが、日本や米国のNPO等からの援助で建てられる事になった長坪村の新しい診療所は設計遅れのために着工が延び延びになっています。村長の話では5月末までには着工できるそうです。この新しい診療所が起工されれば、またご報告致します。



写真3 コンクリートブロックは日本で多く使われているものと違って空洞がありません。



写真2 昨年の地震で壊れた教訓から今ではセメントで固めながら積む家がほとんどです



写真4 これは地震後に山の上などから移住して来た人達の家で、長坪村に町のような通りができつつあります。

前は、経済発展をしていく中でも変わらないケニアの家族の姿について書いた。今回は、その家族が属する地域社会について書こうと思う。多民族国家・ケニアの農村に住む人々は、ほとんどは地域社会の中で生活している。ナイロビ等の都市部を除き、「集落」と呼ばれる場所に同民族だけが住み、同じ文化、同じ言語を共有していることになる。

日本人には、なじみの深い少数部族のマサイ族は「マニヤッタ」と呼ばれる家畜の糞を固めた丸い家を円形並べ住み、ヤギや牛を放牧して生活している。

最大部族であり農耕民族であるキクユ族は、畑を中心として、「クラン」と呼ばれる親戚・家族が集合して生活している。農地は直系の長男から順番に相続させるために、どんどん分割されていく。問題点は例えば、7人男の子供がい

るお父さんは、自分の土地を7分割して息子達に世襲させる。その時点で余程の大地主でもない限り1人分の農地は、かなり狭くなるが、その農地で家族を養うだけの穀物や野菜を収穫しなければならない。その子供がまた子供を数人もつと、さらに土地は分割されていく。最近では、別の地域の土地を与えたり、子供も自分で購入したりしている傾向も見られる。一方、女の子は結婚していくので土地の相続はない。

相続するのは土地だけではない。名前も代々のものを受け継いでいく。しかし、お父さんの名前を継ぐのではなく、おじいさんの名前を継ぐ慣習がある。祖父と男の孫が同じ名前というわけである。

キクユ族は、家族が属するクランをととても大切にする。「近所の人」は、私のような外国人から見ると「近所の人」であるが、かれらにとっては「親戚・家族」であり、血のつながりがあるもの同士なのである。数世代前は、妻を2人、3人と持つ人も多かった為、第一夫人とその家族、第二夫

人とその家族が、お隣同士になって一緒に暮らしている。今でもそんな家族は沢山ある。

似た顔の、似た性格の人同士が近くに住む状況で正直揉め事も多いようだ。しかしそれを回避したり調整したりする手段として、数多くのクランでの「話し合いの場」がある。私もいろいろな場に招いてもらって、自己紹介をしたり話したりしたが、とても合理的で効果的な集まりであるように思う。

まず長老とよばれる年配の人が初めの挨拶をし、キリスト教のお祈りをささげる人が同席していて共に祈り、話し合いが始まる。すべての人が一同に会し、男性女性も意見を出し合う。子供は別の席に集められ、話し合いが終わるまで静かにしていることが義務付けられているが、例外なくみんな静かにしている。話し合いが終わると、食



ケニアの人々に囲まれて

事やお茶が主催者から出され、その後は歌や踊りが出ることもある。そして終わりのお祈りをして終わる。

ケニアの農村には「民主主義」の原型があるように思う。民主主義という言葉が始まるまえからあったかもしれない。時に話し合いは夜にも及び、電気もなく灯油ランプだけで人々は語り続ける。ハランベという助け合いのために寄付を募るときも、冠婚葬祭のときも、問題が起きたときも、いいニュースが来たときも、どんなときもこうして民族は話し合っている。

そして外国人の私でさえ夫と共に農村に帰れば、この場に参加する資格があり、家族の問題として意見を言うことを求められている。もちろん部族語であるキクユ語は分からないが、スワヒリ語・英語で話すと誰とはなしに訳してくれている。

「私はこの人たちと家族であって、外国人でないこと」を感じられるケニアの農村を、こうして懐かしく思い出している。

今回からいよいよLTTE(タミール・イーラム解放の虎/the liberation tigers of Tamil Eelam)の支配地域を走破する事になります。

チェックポイントでLTTEの士官から言い渡された、支配地域内を走行する上での注意事項の主な物は次の通りです。

- 1) 地雷処理が終わっていない地域があるので道路外に立ち入ってはいけない、立ち入って発生した被害に責任を負わない。
- 2) 速度制限の40kmを厳守する。
- 3) LTTE兵士や建物等の写真を撮ってはいけない。
- 4) 監視員が配置されているので違反行為にたいしては罰金又は拘束を含めて厳しく対処する。

これらの注意事項の中で一番困ったのが速度制限の厳守です。

バンニのチェックポイントを通過した後は国道9号線をまっしぐらにジャフナに向ったのですが、道路保守が長期間されていなかった事と、トーチカや塹壕の跡、地雷や砲撃によって出来たと思われる深い穴などに邪魔されてスピードを出す事ができません。

穴だらけのガタガタ道をものともせず車高の高い4WDの車が制限速度ぎりぎりですっ飛ばしているのを横目に、僕達の乗っていた車は車高の低いセダンタイプの上に2WDだったために、障害物や穴を避けて右へ左へと迂回運転を余儀なくされ、制限速度の半分もスピードを出す事ができません。先程のチェック

ポイントで荷物を全部降ろしていたトラック、すし詰めのお客を乗せたバスにすら追い越しされる始末です。

少しでも道路コンディションが良い場所で遅れを取り戻したいのですが、このような場所には待っていませんとばかりに道端の木陰で銃を持ったLTTEの監視員が目光らせています。35kmの平均速度を保たなくては午後5時までに150km先のジャフナ側のパライのチェックポイントを通り過ぎないというのに、全く距離を稼ぐ事ができません。

単純に計算すればパライまで辿り着けない事など判りそうな物なのに、相棒のスリランカ人二人はお気楽です。僕の心配など笑い飛ばしてしまいます。いざとなれば袖の下さえ払えばチェックポイントは通過できると考えているようです。

LTTEの支配地域とされる北部地域はドライゾーンと呼ばれ、水不足のためにもともと農作には適さない地域でした。かろうじて紛争の前には幹線道路沿いに灌漑施設が整備された農地が広がっていたのですが、その元農地が今は危険な存在になっています。LTTEと政府軍の双方が、農地に敷設した地雷がそのままになっているからです。

ガタガタ道をしばらく走ると突然に道路が綺麗に舗装されたばかりの地区が現われました。舗装道路とは対照的に道路の両側には以前は農地だったと思われる荒野が広がっています。遮蔽物は何も無いので



道路に設置された警告の看板 LTTE支配地域の道路ではユニセフとNGOによって地雷撤去作業が行われている。写真のような警告板が数km毎に設置されていて最近まで戦場であった緊迫感が感じられる



発掘途中の地雷 道路から1mぐらい離れたところに発掘途中の地雷が剥き出しのまま置かれている。観光客への警告でしょうか？

LTTEの監視員の姿はありません。距離を稼ぐチャンスだとばかりにフルスピードで飛ばしていると、道路の両側に看板が立っているのに気がつきました。車を停めて読んでみるとユニセフや各国のNGOによって掲げられた警告のための看板でした。

この看板によって、チェックポイントで注意された地雷処理が終わっていない地域に入った事に気が付かされました。それぞれの看板には表現は違いますが、「道路の両側には地雷が埋設されている。手足や命が惜しいならば立ち入ってはいけない」という主旨の注意事項が書かれています。

別の場所では道路から1mほど離れた場所に黄色いテープに囲われただけの発掘途中の地雷が剥き出しのまま置かれていました。恐らくは火薬と雷管を抜き取って警告の意味で置かれていると思いますが、手の届く場所に爆発するかもしれない本物の地雷が置かれているのに驚きました。道路から離れた場所には、そこかしこに黄色いテープで囲われた剥き出しの地雷があるではありませんか、恐らくこれらの地雷はまだ生きているのでしょうか。実際に処理作業に携わっている人を見る事は出来ませんでした。目の前には初めて見る地雷処理現場がありました。

これまで、NGOの報告会や様々なメディアを通じて世界中で未処理の地雷によって子供達を含めて数多くの人達が命を落としたり、手足を失っている事に

憤りを感じていました。今、僕の目の前にその元凶が在ります。たとえ紛争が終わっても全ての地雷が除去された事が確認出来るまでは、この土地は農地として人々を潤す事が出来ない事が肌身に伝わってきます。この地区の道路が舗装されていたのは、道路上だけが安全地帯だと云う事と舗装道路から外れたら命の保証がないという事を象徴していました、生死の差は僅か1mです。

ひよんな事から物見遊山でジャフナに行く事になりましたが、LTTEのチェックポイントでの経験だけでなく、道路上のトーチカや塹壕の跡、道路沿いに配備されているLTTEの兵士達、そして埋設されている地雷を間近に見た事によって、遠い所の漠然とした存在であった紛争がひしひしと身近に感じられる様になってきました。僕はこの時、休戦中とはいえパワーバランスがひとたび崩れれば、今すぐにでも戦闘が再開可能な状況にある戦場にいたのでした。 (続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

「わんりい」おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 「わんりい」

「わんりい」の名は、「万里」の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報「わんりい」を発行し、情報の交換に努めています。

- ▲入会はいつでも歓迎しています。
- ▲入会すると「わんりい」の全ての活動に参加できます。
- ▲活動の様子は、おたより又は「わんりい」HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

❁ 表紙写真の説明

❁❁ モスレムの子どもたち ❁❁

スリランカでシンハラ人とタミル人に次いで多いのがモスレム(イスラム教徒)です。コロンボ市内では場所によって民族ごとに住み分けており、たまたまモスレムの人たちが多い地域を歩いていたら、偶然この2人の子供たちに出会いました。

モスレムの人たちは写真を撮られるのを嫌がりますが、この子供たちは違いました。彼らの人なっこや純真さに惹かれて、写真を撮りました。(為我井)

※為我井さんは、スリランカの文化及び教育支援を目的とした活動を展開しており、その活動の折に撮影した写真をもとに、写真集「カメラを通して見たスリランカ」を今年1月出版されました。久美堂本店と西友町田店7Fのリプロで販売中です。

*定価：1050円(税込み)

*問合せ：為我井 ☎042-735-9583

ガタガタッ!!・・・扉を開く音でハッと目が覚めた。開かれたドアや壁の隙間からは明るい朝日が差し込んでいる。節々の痛む身体を軋ませながら半身を起こすと、旅行者らしい若い青年達が呆れたような顔をして、ゴミが散乱した物置小屋の真ん中で眠っていた私達を覗きこんでいた。自分が何処にいるのか思い出すと、安堵の喜びが込み上げてきた。

ああ～！朝になったんだ!! 良かった～!!

・・・昨夜、ヨロける足を引きずりながら暗い林を抜け、ボロ雑巾になったような気分ルオロンニューチャンで洛絨牛場までたどり着いた私とウィンルオロンニューチャンは再び老女と子供達のいる牛番小屋を訪れた。

「友達を連れて来たよ～！」

チベット族の老女は私達の姿を見るなり慌てたように、すぐに離れの物置(のように見える)小屋に入るようにと言った。ええ～、ちょっとくらい休ませてくれたって良さそうなものじゃん・・・

老女達の小屋の中では囲炉裏が暖かそうな炎を上げていた。踏み固められて黒光りしている土間に置かれたダンボール箱のなかに眠っている赤ちゃん。小さな弟の面倒を見ながら目をキラキラさせて私達の様子を窺っている女の子。

先程日が落ちてから急速に空気がひんやりとしてきたのが服を通して感じられていた。ゴミの散乱している寒々とした物置小屋を思うと、暖かい囲炉裏を囲んで家族が団欒しているこちらの小屋にとどまりたかった。

「ねえ、私達もこちらの小屋と一緒に泊まらせてよー!!」

往生際も悪くダダをこねる私に老女はにべもなく首を振ると、いいからさっさとあっちの小屋に入ってくれ!! と犬を追い払うような仕草で私達を追い立てた。

「じゃあ、せめてお湯を頂戴よ」

「後で持って行ってやるから早く行っておくれ!! 明日の朝になるまで絶対に小屋から出ちゃいけないよ!!」

老女の慌てぶりは訳あり風で、意地悪で言っているのではないようだった。

きっと管理人に見つかる事を怖れているのだ。洛絨牛場に着いてからの流れで薄々判ってきた事だが、ここは政府に管理されている土地で、所定の場所以外に旅行者を泊めるのは禁じられているのだろう。林の奥にある先程の男達の小屋とは違ってこちらは広々と開けた牧草地の端に建っているのだ。私達が外をウロ

チョロしていれば目立つだろうし、湿原の対岸には政府に管理されている宿泊小屋があり、私が先程の管理人に出会ったのもその辺りだ。お金は欲しいが旅行者を自分の小屋に泊まらせているのが見つければ、宿主も面倒な事になるのに違いない。最初から老女が私達を泊まらせたがらなかったのはきっとそういうことなのだ。

私たちはしぶしぶ少し離れた場所に建っている物置(のような)小屋に向かった。ガッシリとした丸太や石で固められた老女達の堅牢な小屋とは大違いの、ブリキのトタンに囲われただけのバラックだ。しかしそれでも先程の男達の小屋であてがわれた廃屋よりは何倍もマシな気がしていた。

ジュースの空き缶やラーメンの包み紙、空き箱などのゴミの散乱した土間の奥には先人が滞在したなごりのように広いスノコがおいてあったので、これまた小屋の中に捨ててあった工事現場のビニールシートのような物をその上に敷いて荷物を降ろし、まだ少し不安そうな顔をしているウィンに声を掛けた。

「大丈夫だよ！もう心配ないから私に任しておいて!!」

背負ってきた大きなザックの中から、私は次々と得意気に荷物を取り出して、ヘッドランプと懐中電灯を低い天井の梁にぶら下げた。

携帯ナイフで梨をむき半分に切って二人で分けると、程なくして老女が運んできてくれた魔法瓶のお湯を日本から持ってきたアルファ米のパックに注ぎ込む。

お湯を注いで20分程待つだけで、乾燥した米に水分がしみこんで炊きたてのような暖かいご飯が食べられるという優れものだ。私が持っていたのはちゃんと味のついた具も入っている炊き込みご飯で、山で食べるインスタントご飯としては味の方も十分にいける代物だ。一口食べたウィンは顔をほころばせ「美味しい」と呟いた。

考えてみれば今日は早朝に麺を一杯食べたきり、殆ど何も食べずに一日中歩き回っていたのだ。二人でかわりばんこにスプーンを使ってアルファ米の炊き込みご飯を食べると、マグカップにザックから取り出したお茶葉を振り入れてお湯を注ぎこみ、茶葉が口に入らないように上澄みだけ啜ってお茶を飲んだ。ウィンがザックの中からチョコレートのクッキーを取り出して勧めてくれる。

疲れきってさほど食欲も無かった私達はすぐにお腹が一杯になってしまった。人心地がつくとウィンは

ちょっと尊敬のこもった眼差しで私を見つめて言った。
「元子、私あなたみたいに強い女の人に会ったことないわ」

思わず笑ってしまった私は「そうよ。私はとっても強いよ」と腕を上げて力瘤を作ってみせた。

ほの暗い懐中電灯の明かりの下で暫く喋っているうちにすぐに眠くなってしまった。ザックからダウンのシュラフを取り出すと、持ってる洋服を全部身に着けてからもぐって眠るようにとウィンに渡し、自分はこんな事もあるかと持ってきていたダウンのパンツに本来は街着だったお古のダウンジャケットを着込めると、シュラフカバーの中にもぐりこんだ。夜は冷えるだろうがこれでなんとか過ごせる筈だ。

「私ね、こんな場所に泊るのは初めてだよ。こんな風に寝るのも初めて・・・」ウィンが言った。

そうだよね・・・。最初にこの場所を見た時ウィンが激しく拒否反応を示した気持ちが今になって解るような気がした。彼女は山小屋などに泊まった事も無い普通の女の子だったのだ。

私の背負っていた荷物の内容も知らされていないウィンにしてみれば、十分な食料も布団も無い状態で、ほぼ野宿といえるような場所にどうやって泊まれるのか想像もつかなかったのだろう。彼女には酷い体験だったかもしれないが、後で思い返せばきっと心に残る旅の思い出になるにちがいない。ウィンには悪いが私にしてみれば概ね希望していた通りの形で洛絨牛場に泊まる事ができた訳だ。

もしも洛絨牛場の宿泊施設が開いていたなら、皆に笑われながらここまで重い荷物を背負って歩いてきた甲斐が無かったというものだ。何の苦労もなく普通の宿に泊まるより断然こっちの方が面白い。今日も色々あったけど、終わり良ければ全て良し。あれほど林の中を無駄に駆けずり回ったことさえ、今となっては笑い話になっている。私はすっかり満足していた。

横になり今日の出来事を思い返しているうちに、朝から歩き回った疲れもあってすぐにウトウトと眠ってしまったらしい。そのまま朝までぐっすり眠っていたかったが、数時間程たったところで再び眠りの世界から呼び戻されてしまった。寒いのだ。夜が更けるにつれてシンシンとした寒さが小屋の中にまで忍び込んできていた。暫くはそのままやり過ごして再び眠りにつこうと努力していたが、そうしている間にもますます身体が冷えてくる。寒さに耐えているうちにすっかり目が覚めてしまった。枕元においていた時計をみるとまだ11時過ぎだ。

ああ～夜はまだまだ長いじゃないか～。絶望的な気

持ちになった。せっかく今日一日の疲れをとるために泥のように眠りたかったのに。隣を見るとウィンは静かに眠っているようだ。あっちのシュラフの方が暖かいのかなあ。

安物ダウンジャケットの中綿はポリエステルだ。本物のダウンが詰まったシュラフをウィンに貸している事がちょっと恨めしい。口から吐く息が白くなっているのが見えた。

ザックの中にホカロンがあった事を思い出して取り出し何箇所か貼り付けてみたが、場所が悪かったのかさほどの効果は得られずに、それから明け方近くまでウトウトしては寒さに目を覚ますことを繰り返しながら、ひたすら早く朝が来る事を願って過ごした。いくら8月とはいえ、やはり高度4000メートルでのキャンプは楽じゃない。最後に時計を見たのは既に4時を回っていただろうか、それからようやく私は本格的な睡眠に入っていったようだった。

突然響いたドアの音に起こされた私とウィンが寝ぼけ顔で起き上がると、ドアの隙間から顔を出していた青年達が呆れたように言った。

「君達、昨夜はここに泊まったの～!?」

改めて彼らの顔を見直してみれば、昨日沖古寺で出会った学生達だ。

「なんだ君たちかあ、おはよう～!!」

時計を見ると9時過ぎだった。外に出て行くとサンサンと朝日が輝く中、男女合わせて7人でやってきたという学生達が思い思いに小屋の周りに散らばっている。中国語では『牛奶海^{ニウウナイハイ}』という名で呼ばれている宝石の湖を見に行くために、今朝早く沖古寺を出てここまで歩いてやって来たのだそうさ。

思わず全身の力が抜けそうになった。今日宝石の湖を目指そうとしていたのは私達も一緒だ。そのために少しでも近くまで進んでおきたい気持ちもあって、昨日無理して洛絨牛場目指して歩いて来たというのに、結局スタートは一緒じゃないか!!

昨日の彼らは沖古寺で早めに宿に入ると快適な寝床でゆっくり休み、今日の鋭気を養って朝早く起きると、昨日の私達が重い荷物を背負い何時間もかけてダラダラと登って来た山道を、ピクニック使用の軽装でスタスタと2、3時間程度で登ってきたという訳だ。どちらが賢い行動かは考えるまでも無いが、あえてバカバカしい苦労をわざわざ好んでやっている自分たちの方がきっと面白い。面白いに決まってる!! やはり私の旅はこれで良いのだ。

湿原を流れる小川の水で顔を洗った。老女の小屋でお湯をもらい、熱湯を入れるだけで食べられるインス

tantラーメンを作ってウィンと食べると、昨日広げていた荷物をまとめ、宿代の20元を支払った。昨日10元からいきなり30元に跳ね上がった宿代は後からウィンに交渉させて、なんとか真ん中の20元にまとめてもらったのだ。あんな小屋では10元でも人の足元をみてのボッタクリだと言えないこともないが、先方は嫌だと言っているところに無理やり泊めてくれと押しかけたのは私達だ。管理人に見つかれば何らかのペナルティを受けなければならないリスクも含めた価格だと思ふことにした。ハイキング用の小さなザックだけを背負い、大きなザックは戻ってくるまで小屋で預かってもらうように頼むと老女は快く承諾してくれた。

「ところで、ここから牛奶海までの道はわかるかい？」

私達と一緒に老女の小屋の中に腰掛けて、話していた学生の一人が言った。

「あたしがガイドしようか？ 30元だよ!!」

すかさず、利発そうな小屋の少女が声を上げた。年齢を尋ねればまだ10歳とはいえ、弟の世話や家事など見ているとクルクルと良く働いている。もうお金を稼ぐ事もできる一人前の家族の担い手なのだ。

学生の一人が私の方を向いて言った。

「ガイドがいた方が良くないかなあ？」

「そんなものは必要ないわ！ 道なら私に任せて頂戴!!」

私は即座に答えると、女の子に「ごめんね、道は知ってるのよ」と小声で謝った。

さあ、出発の準備が整った。

「出発するぞお～!!」

リーダー格らしい青年の呼び声に、それまで辺りに散らばっておもいおもいに休憩を取っていた男女達が集まってきた。

「さあ、ここからは君がリーダーだ。宜しく頼むぜ」

青年が私に向かって言った。

いよいよこれから幻の湖に向かって出発するのだ。思いがけなく旅の仲間も増えて、楽しい道中になりそうじゃないか。

「オッケー!! みんな私に着いてきて!! レッツ・ゴー!!」

絶好調に気分の盛り上がってきた私は、叫び声を上げると青い空に向かってこぶしを振り上げた。 (続く)

【“わんりい”活動報告】

あさおサークル祭(5月23日・24日)

TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル演奏会

川崎市麻生市民館利用団体によって開催の「あさおサークル祭」が今年も5月23日(土)と24日(日)の二日にわたって開催されました。‘わんりい’は「TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル演奏会」で参加し、用意の座席が満席となり途中で新たに椅子を用意するという嬉しい誤算がありました。

2000年、‘わんりい’が馬頭琴演奏家のチ・ボラグ氏とチ・ブルグッドさん親子に協力し内モンゴルの小学校を再建し、会のメンバー達が開校式に参加しました。この旅行中、開校式その他で馬頭琴の歓迎を受けたメンバーの中から馬頭琴を弾いてみたいという声上がり、チ・ブルグッドさんを講師として「万馬・馬頭琴教室」が始まりました。

その後の紆余曲折を経て熱心に練習を続けた人たちが2007年、日本人のみによる初めての馬頭琴アンサンブルとして「TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル」を立ち上げました。日本で自主公演するなどの活躍のほか、馬頭琴の本場の、内モンゴル・フフホト市やモンゴル共和国・ウランバートルで公演し高い評価を得ています。今年5月の連休にも、内蒙古大学・芸術学院(内モンゴル・フフホト市)で演奏し、200名収容のホールは立ち見が出るほど盛会だったとのことでした。



▲ TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル 皆さんとケーナ演奏の山下孝之さん

音楽監督のチ・ブルグッドさんも演奏▶

あさおサークル祭では、内蒙古大学・芸術学院で演奏を果たしたばかりの素晴らしい音色を1時間半にわたって楽しみました。又、シンセサイザー演奏者の山下孝之さんが南アメリカ・アンデス地方の民族楽器・ケーナを独奏くださると共に馬頭琴との合奏も試みていただきました。

アンデスの先住民族は、先史時代にユーラシア大陸からアリューシャン列島を越えて南米大陸に渡ったモンゴロイドの末裔といわれています。地球の表裏のモンゴロイドの楽器が「あさおサークル祭」で初めて音を合わせるといった試みになりました。モンゴル民謡の「天上の風」では、馬頭琴の音色とケーナの音色が高く又低く天空で絡み合っているようでした。今後期待できると確信しました。

(報告：田井)

ドキュメンタリー映画

「BASURA バスーラ」(監督: 四ノ宮浩)

2009年6月27日(土)～ ●各回定員入替

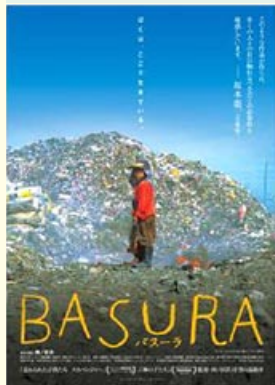
平日 10:20/12:30/14:40(旧作上映)/16:50/19:00

土日祝 11:00/13:30/16:30(旧作上映)/19:00

※月曜休映(月曜日が祝日の場合、その翌日が休映)

於: 東京都写真美術館ホール

▲公式サイト <http://www.basura-movie.com/>



1990年代の中ごろ、フィリピン・マニラ近郊“スモーキーマウンテン”とよばれる巨大なゴミ捨て場がしばしばマスコミに取り上げられた。

分別なしに捨てられるごみの山に群がって換金できるものを拾って生計を立てる人々やその大人たちに混じってごみを拾う子どもたちの姿に衝撃を受けた。「スモーキーマウンテン」の呼び名は、ごみから発生するメタンガスが自然発火により年中煙が上がっていたことに由来するという。

この悪臭芬々たるゴミ捨て場に6年にわたって住み込み、通い続けて記録映画「忘れられた子どもたち・スカベンジャー(ごみを拾って生活する人)」を完成させた四ノ宮浩という日本人映画監督がいる。今回、東京都写真美術館で上映が予定されている「BASURA・バスーラ」は、その四ノ宮監督による「忘れられた子どもたち・スカベンジャー」の20年後の子ども達の姿だ。

1995年、フィリピン政府はスモーキーマウンテンを突如閉鎖し、生活の場を奪われた人々に対し永久住宅を用意した。しかし、新しい職業を見つけられない9割の人々はスモーキーマウンテンに程近い新しいゴミ捨て場で以前と変わらぬゴミ拾い生活を続けているという。

私は残念ながら「忘れられた子どもたち」を見ていない。しかし映画「BASURA・バスーラ」の中のところどころに挿入される第一作の子どもたちは健気で逞しく、貧しい生活の中で夢を語り未来を見ている。時は否応なしに流れ、決して平穩無事ではなかったはずの20年間を経て一見安定した生活を手に入れたかのように見える彼らの生活も実はきわどい綱渡りの上での安定なのだ。が、彼らの素晴らしさや或いはすごさは、明るさであ

り決してめげないことだ。愚痴を言ったり、人の所為にすることもなく現実を現実として受け入れ乗り越えようと努めている。

四ノ宮監督は「忘れられた子どもたち」に続く作品「神の子たち」(2001年)で「人間とは、もう後がない断崖絶壁(絶体絶命)の状況になり、【死】を意識すると前向きに生きるものかもしれない…。家族とは大変であればあるほど、家族の絆を強めていくのかもしれない…」と述べている。また、「Busura バスーラ」では、「今回の映画は涙目で見ないで欲しい。貧しき人たちも僕たちも同じ人間であり、片方が頼り依存するという関係であってはならない。全ての人々が力を合わせ、お金や情報や石油などに振り回されない素晴らしい地球を作り上げようではないか」と呼び掛ける。監督の確かな信念に裏打ちされたこの映画には作り話ではない強い説得力がある。「バスーラ」はそんな四ノ宮の呼び掛けに共感した人々の支援と協力で制作され、「アジアの貧しい子ども達へのサポートプロジェクト」が始まっている。

(田井)

* 'バスーラ' とはタガログ語で 'ゴミ' の意味とのことである。

四ノ宮 浩(しのみや ひろし)

- 『忘れられた子供たち スカベンジャー』(1995年) 第44回マンハイム国際映画祭ベストドキュメンタリー賞受賞。
- 『神の子たち』(2001年) 第52回ベルリン国際映画祭、第26回モントリオール国際映画祭ほか多数の映画祭から正式招待、NY・MOMAでの「New Directors/New Films」映画祭上映第5回シネマアンビエンテ環境映画祭(イタリア)コンペティション部門ではグランプリを受賞。
- 2007年、貧しい環境で生きる子供たちへの直接的支援を目的とした「アジアの貧しい子供たちへのサポートプロジェクト」を立ち上げ支援活動を行うなど、映画以外の活動も多岐にわたる。

映画・「嗚呼 満蒙開拓団」(2008年)

羽田澄子演出 自由工房作品

あなたは満蒙開拓団の悲劇を知っていますか

2008年キネマ旬報文化映画ベストテン第1位/2008年日本映画ペンクラブ文化映画ベスト1/2008年東京国際女性映画祭オープニング作品

於: 岩波ホール (<http://www.iwanami-hall.com/>)

2009年6月13日(土)～7月31日(金)まで

●各回定員替

月～金⇒11:30、2:30、6:30

土・日・祝⇒11:30、2:30、5:30

【6月の定例会とおたより発送日】

●定例会: 6月10日(水) 14:00～ 田井宅

*開始時間が平常と異なりますのでご注意ください。

●7月号おたより発送: 6月30日(火) 13:30～田井宅

'わんりい' 3月号で紹介の、ドキュメンタリー映画

「長江に生きる」～兼愛(ビンアイ)の物語～

(監督☆フォン・イェン) ◆追加上映されています。

●ポレポレ東中野(JR東中野北口及び西口徒歩2分)

5月30日(土)～6月12日 連日 13:00/16:00

●シネマート六本木(地下鉄六本木駅3番及び5番徒歩2分)

6月6日(土)～19日(金) 連日 10:45/13:10

6月20日(土)～26日(金) 時間はお問合せください。

☎03-5416-7711 ▲<http://www.bingai.net/>

「四川リアリズム - 30年を経て - 四川美術学院現代絵画展」 観覧料：無料
 四川美術学院の教授、卒業生、在学生による現代絵画 約80点(油絵、一部アクリル画等)

2009年7月25日(土)～8月19日(水) / 休館日：毎週月曜日 10時～17時(毎週金曜は19時まで閉館)
 於：日中友好会館美術館・大ホール 〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3
<http://www.jcfc.or.jp/event/sichuantokushu.html>

都営大江戸線・飯田橋C3出口・徒歩約1分
 JR飯田橋・徒歩7分、丸ノ内線・後楽園駅・徒歩10分

主催：財団法人日中友好会館、四川美術学院
 後援：中国大使館、社団法人日中友好協会 ほか

- ギャラリートーク：7月25日(土)15:00～
 ※来日した四川画家(予定)による
 解説を予定。

◆お問合せ：03-3815-5085(文化事業部)

文革終結・改革開放以来、中国美術界を牽引して
 きた四川・西南地方の画家達。何故内陸部に
 住む彼らが一目置かれてきたのか—



嫌食主義者宣言NO1
 張奇開(ジャン・チーカイ)



記憶の喪失と記憶 - Amnesia
 and Memry 張曉剛(ジャン・シャ
 オガン)2003

中華人民共和国建国60周年記念事業

天津青年京劇団「霸王別姫～漢楚の戦い～」
 項羽と劉邦の戦いに秘められた激しくも悲しい愛の物語

2009年6月4日～14日
 東京芸術劇場 中ホール
 S席 8,500円
 A席 7,500円
 (全席指定・消費税込)



主催：日本経済新聞社
 財団法人日本青少年文化センター

- ◆申込み・問合せ：
 京劇公演事務局(楽戯舎内) 03-5281-8066
 (平日10:00～18:00 土日祝休)
 *詳細は、<http://www.rakugi.net/event200906/index.html>

ハートフル2009モンゴル民族文化基金
 第7回チャリティコンサート

中国各地のモンゴル族の子どもたちに奨学金を!!

【出演】

歌手：芹洋子、新垣勉、井上あずみ、
 エレクトーン：神田将、
 フラメンコ：小林伴子 二胡演奏：チェンミン
 馬頭琴演奏：チ・ブルグッド など



於：北とピア さくらホール
 2009年6月11日(木) 19:00開演(開場18:00)
 (北区王子1-11-1(JR王子駅、地下鉄南北線王子駅1分))

- 前売り3500円(当日4000円)
 中学生以下2000円(全席自由)
- ◆申込&問合せ：☎03-3914-7208(モンゴル民族文化基金)

E-mail:muss@Live.jp
<http://www.mongol-ncf.com/20090611.html>

★6月の歌

mǎ yī lā
 玛依拉

哈萨克民歌*
 王洛宾编曲

rénmen dōu jiào mǎ yī lā
 人们都叫玛依拉

shī rén mǎ yī lā
 诗人玛依拉

yá chǐ bái shēng yīn hǎo
 牙齿白声音好

gē shǒu mǎ yī lā
 歌手玛依拉

gāo xìng shí chàng shàng yī shǒu gē
 高兴时唱上一首歌

tán qǐ dōng bù lā dōng bù lā
 弹起东不拉、东不拉

lái wǎng rén men jǐ zài
 来往人们挤在

wǒ de wū yán dǐ xià
 我的屋檐底下

mǎ yī lā mǎ yī lā
 玛依拉、玛依拉

hā lā lā kù lā yī lā
 哈啦啦库、拉一拉

hā lā lā kù lā yī lā ya
 哈啦啦库、拉一拉呀

lā lā lā lā
 拉拉拉拉

* 哈萨克=カザフスタン

‘わんりい’ 会員と関係者の皆様へ

ウイキョウ

「茴香の手作り餃子と燕麦の麺」を作って食べよう!会
 2009年6月6日(土)10:00～14:00

於：三輪センター 参加費：1000円～1500円の予定
 持ち物：筆記用具、エプロン、プラスチック容器

予定メニュー：上記2種類の他、サラダ、スープ、デザート付

* ‘わんりい’ 会員と関係者のみ10名 詳細は事務局へ